# 遊戯王 ～竜騎士を束ねし者～

ドラグニティ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
遊戯王　～竜騎士を束ねし者～

【Ｎコード】
Ｎ８８６３Ｓ

【作者名】
ドラグニティ

【あらすじ】
デュエルアカデミアに特待生として入学した駿河龍二の学園生活を描きます

時代は遊星達が伝説のデュエリストとして語られているあたりです
デュエルの方法はＡＲＶ（個人的に一番好きです）
なので世界観的にはシンクロ主流のＡＲＶデュエルです
もちろんエクシーズも出します
もしかするとライティングを出すかもしれません

ルールはアニメルールとＯＣＧを合わせていきます

初めてなので暖かい目で読んで頂ければ嬉しいです

※リメイクが一段落しました

# TURN0　入学（前書き）

リメイクが一段落したので載せてた分までは急いで載せようと思ってます

お気に入り登録されてる方には迷惑かけました
これからは別物の感覚で読んでいただきたいです…

長々と失礼しました
リメイク版どうぞ

# TURN0　入学

SideRyuli

俺の名は駿河龍二
今年このデュエルアカデミア本校に特待生として入学した

中学時代、最後の全国大会で準優勝に終わった俺にアカデミアの親会社である海馬コーポレーションが「お前、デュエルアカデミアに入らないか？」と言ってきたのだ
その時は、優勝した子もアカデミア生ではなかった筈なのになぜ俺だけに声を掛けたのかが不思議だった

昔話はさておき、今俺は校舎の廊下を歩きながら校長室へ向かっている

…周りから「あの子が例の特待生？カッコよくない？」と言う女子の声や「特待生だからって調子乗りやがって…」的な男子の声も聞こえるが、俺はそれらをスルーして急ぐと目的地に着いた

「失礼します」

決まり文句で中へ入ると
「君が駿河くんか…社長から話は聞いてるよ」

校長は更に続ける

「まあ、特待生と言ってもそんなに気負うことは無い。伸び伸びと学園生活を送ってくれ」

俺は思ってた事と真逆の事を言われたので少し驚いた

その後、校長室を後にして俺は自分の寮へ向かった

## TURN0　入学（後書き）

拍車駆けといて短くてすみません

まぁ、次話はなるべく早めに載せるように努力します

# TURN1　登場（前書き）

リメイク版です

駄文ですがよしなに願います

## TURN1　登場

SideRyuji

俺は今寮へ帰る途中だ

しかし、お腹がすいたので購買へ行こうと廊下の角を曲がった時

『ドンッ』

「きゃっ」

誰かが正面からぶつかってきた

マンガみたいな光景だ…

「いたた…あ、ごめんなさい、大丈夫ですか？」

俺は全然平気なのだが、ぶつかった彼女がその場で倒れていたので

手を差し伸べた

「俺は大丈夫、君こそ大丈夫？」

「うん大丈夫、ありがとう」

そう言うと彼女は俺の手を取り立ち上がった

この娘よく見ると結構かわいいなと思った瞬間

「あああぁぁぁ〜〜！！！」

いきなり大きな声を出されて思わず俺は耳を塞いだ

「あなた例の特待生だよね？」

「え？そうだけど…」

「やっぱりだ〜あたしあなたのことよくテレビで見てたの！」

「あ、そうなんだ…」

「でも髪って緑なんだね、テレビだと黒に見えるから」

「え、そうかな…」

彼女のハイテンションに全くついていけない俺…そこに

「理奈〜」

「あ、紗英華」

もう一人女の子がやってきた

「もう〜、一人であっちこっち行ったりしないでよ」

「ゴメンゴメン。あ、紗英華、そこに特待生の子がいてね、さっきぶつかっちゃったんだ（笑）」

どうやら俺にぶつかってきた娘は理奈って言うらしく、後からきた

この娘は紗英華って言うらしい
この娘はかわいいと言うより綺麗って感じで髪が水色だ

「全く…あ、ごめんね、友達が迷惑かけて、普段はもうちょっと大人しいんだけど〔この前テレビに出てた人が特待生で入って来る〕って聞いて『その人を見つけに行く！！』って学園中走り回っちゃって…」

「そうだったんだ…」

〔この前テレビ映ったって何時の話だっけ？〕と考えてると…

「ねえ駿河くん、明日あたしとデュエルしてくれない？」

不意に理奈ちゃんが言い出した

「別にいいよ。」

俺は快くＯＫした
正直こんなかわいい娘とデュエルなんてそうそうできないから断るのは勿体無い

「本当？嬉しい～！じゃあ、駿河くんにあたしの連絡先教えるね」

「ありがとう、じゃあ後で連絡するから。あと“駿河くん”って呼び方止めて欲しいな」

「そう？それじゃあ……
“龍くん”でいいかな？」

「うん、その方がいい」

「わかった。じゃ、またね～」

「うん、またね」

ＳｉｄｅＯｕｔ

ＳｉｄｅＲｉｎａ

（やった～～
あの駿河龍二くんと念願のデュエル…夢みたい～）

「……ぁ～、…な～、り～な～」

紗英華の声で我に帰った

「あ、ゴメン。呼んだ？」

「ったく…浮かれてる場合？明日の休み明けの筆記試験ヤバいんじゃなかったの？」

「あ……忘れてた」

「どうすんの？」

「諦める。どうせ英語しかできないし、明日は龍くんとのデュエル

に集中する」

「ハァ、結局いつものパターンじゃん」

紗英華には呆れられたがあたしは本気なのだ

rrrr…rrrr…rrrr…rrrr…

「理奈、電話鳴ってる」

「本当だ」

「誰？」

「…龍くん」

「じゃ、早く出なよ」

「わかってるよ…」

ピッ

［もしもし？］

［もしもし？龍二だけど、本当に明日の放課後でいいの？
明日テストだよね…
理奈ちゃん大丈夫？］

［気にしないであたし勉強しなくても英語はできるから。
あとちゃん付けしなくていいよ］

［え、でもそれって英語しかできないってことだよね？ダメだよ。テストの成績悪くて理奈が補習受けるとかなったらイヤだからさ…解らないことは俺も手伝うからまずテスト頑張ろう］

（うぁ～すごいな…さっき会ったばかりなのにすごいあたしのこと気遣ってくれてるよ…
デュエル強くてイケメンなのに性格もいいなんて…
…さり気なく名前呼びも修正されてるし…）

［ありがとう。じゃあ迷惑じゃないならお言葉に甘えさせてもらうね］

［全然大丈夫。何なら紗英華ちゃんもどう？］

［『いえ、私は用事があるのでお二人でどーぞ』］

［そっか、じゃあ、中庭で待ってるから］

［うん、また後でね］

p…p…p…p…

「ちょっと！？何勝手な事してるの！？」

「ゴメンゴメン、でもよかったじゃん！龍くんとデートだよ」

「え？何？紗英華は用事だから来ないんじゃないの？しかもデートってどういうこと？」

「用事は嘘
大好きな龍二くんと二人っきりを楽しんで来いって言ってるの」

「べ、べ、別に遊ぶ訳じゃないんだよ
し、しかも龍くんみたいないい人があたしのこと好きになるわけないじゃん」

「ふ～ん、龍二くんを好きなのは否定しないと…」

「うぅ、そ、それは…あ、あたし行かないといけないから」

あたしは全力で逃げる

「あ、逃げた…」

ＳｉｄｅＯｕｔ

ＳｉｄｅＳａｅｋａ

理奈大丈夫かな？
龍二くんの前でショートしそうで怖いな…
それにしても龍二くんは本当にいい人だね
よし、龍二くんと理奈を絶対くっつけてみせる
その為にはまずは龍二くんのことといろいろ調べなきゃ

ＳｉｄｅＯｕｔ

ＳｉｄｅＲｙｕｊｉ

（あぁ、さっきはついあんなこと言っちゃったけど
言い方悪かったな…
まあ、来てくれるんだから全力でサポートしなければ）

「龍くん？」

「あ、理奈」

「ゴメンあたしなんかの為にこんな…」

「別にいいよ
一応勉強あってのデュエルだからさ」

「本当に申し訳ない…」

そうして俺は彼女に勉強を教えた

作：言ってませんでしたが一応龍二は中学時代は学年一位です

ＳｉｄｅＯｕｔ

３時間後…

ＳｉｄｅＲｉｎａ

あたしは龍くんと別れて、今自分の寮にいる

（ヤバい…龍くん頭良過ぎ～！！
しかも教え方メチャ上手いし
龍くん一体何者？
ここまで完璧な人間がいるなんて…
まさに雲の上の存在
あたし、自信なくなってきた…）

ＳｉｄｅＯｕｔ

翌日

ＳｉｄｅＲｙｕｊｉ

俺は今日、自分の教室に初めて入った
今まで忙しかったからだ

そこで俺はびっくりした

なんと理奈が教室にいたのだ
しかも席が隣って…

運命ってすごいね…

「あれ？龍くん？
あ、もしかしてこの席？」

「そうみたいだね…」

「よかった～このクラス全然知り合いいないからどうしようって思ってたの」

「紗英華ちゃんは？」

「紗英華は隣のクラス」

「へぇ、ｓ『ガラガラッ』先生来た」

そう言って前を向く

「今日は午前中にテストを行い午後から放課後となりますので頑張って下さい」

それだけ言って先生は教室を後にした

そしてテスト後…

「テスト大丈夫だった？」

「うん、龍くんのおかげで赤点は免れたと思う…
あ、そうだ、龍くんお昼ってどうしてる？」

「昼はいつも弁当だよ」
「へぇ…自分で作るの？」
「そりゃあ、そうだよ」
「じゃあ、紗英華も呼んで一緒に食べない？」
「もちろん、いいよ」
「本当？じゃあ紗英華と購買行ってから戻るから待っててて」
と言って理奈が教室を出ていった
（二人が来るまで暇だな…
デッキの調子も見たいし、誰か相手してくれないかな～
でも知り合い他にいないしな…）
「おい、あんた」
「ん？」
知らない二人組から声を掛けられた
一人は背が少し高めの奴、もう一人は背が小さくてなんかやる気が無さそう
すると、背の高い方が
「俺、日向崇裕ってんだ
突然で悪いけど、あんた強いらしいから

オレとデュエルしてくれないか？」
いきなりデュエル申し込んできた
（唐突だけど、ちょうどいい）
「別に構わないけど」
そう言って準備する二人
そこに理奈達が戻ってきた
「あれ？龍くん誰かとデュエルしてるＡＲＶリンクしよっと」
「「デュエル！！！」」
日向ＬＰ４０００
龍二ＬＰ４０００
日向
「オレのターン　ドロー
オレは＞六武衆の門＜を発動
こいつは俺の場に＞六武衆＜と名の付くモンスターが召喚、特殊召喚されるたびに武士道カウンターを２つ置く」
日向の後ろに大きな門が現れる
真ん中には六武衆の紋章が刻まれてある
「六武衆か…」

「そうだ。続けるぞ
俺は＞真六武衆ーカゲキ＜を召喚
効果で＞六武衆の影武者＜を特殊召喚
さらにこいつは自分の場に六武衆と名の付くモンスターが２体以上
いる場合手札から特殊召喚できる
来い＞大将軍　紫炎＜」

大将軍　紫炎
ＡＴＫ２５００

腕が四本の剣士と帽子を深く被り片膝を付けている戦士、そして赤
い甲冑を纏い、大きな剣を持った将軍が現れた

武士道カウンター
０→４

「さらにいくぞレベル３＞カゲキ＜にレベル２＞影武者＜をチュー
ニング」

＞影武者＜が２つの輪になりそこへ＞カゲキ＜が入る

☆３＋☆２＝☆５

「戦国より蘇りし武将よ、燃え上がる闘志が道を切り開く刃と成らん
シンクロ召喚！」

カゲキが３つの星になり光を放つ

「出陣！真六武衆ーシエン」

真六武衆－シエン
ＡＴＫ２５００

今度は若返った紫炎が現れる

武士道カウンター
４→６

「さらに六武の門の効果
武士道カウンターを４つ取り除いて六武衆と名の付くモンスター１体を手札に加える
俺は＞六武衆の師範＜を手札に加えて特殊召喚
さらに＞真六武衆－キザン＜を手札に加えて特殊召喚」

六武衆の師範
ＡＴＫ２１００
真六武衆－キザン
ＡＴＫ１８００

隻眼の剣士が２人現れる
１人は白髪、もう１人は黒髪である

武士道カウンター
６→２→４→０→２

「＞師範＜と＞キザン＜は場に＞六武衆＜がいる時特殊召喚できる
更に＞キザン＜は場に他の＞六武衆＜が２体以上いるとき攻撃力が３００Ｐアップする」

真六武衆－キザン

ＡＴＫ１８００→２１００
カードを一枚伏せてターンエンド」

日向ＬＰ４０００
手札１枚
場　モンスター
大将軍　紫炎
ＡＴＫ２５００
真六武衆－シエン
ＡＴＫ２５００
六武衆の師範
ＡＴＫ２１００
真六武衆－キザン
ＡＴＫ２１００
魔法・罠
六武の門
（武士道カウンター×２）
伏せカード×１

理奈
「すごい展開力、先攻１ターン目でこんなに…」

龍二
「俺のターン　ドロー
俺は手札から＞ドラグニティ－ファランクス＜を墓地に送り＞調和の宝札＜発動」

「甘い！オレは＞真六武衆ーシエン＜の効果発動
1ターンに一度相手の魔法・罠を無効にする
覇者の眼差し！！」

「だがその効果は1ターンに一度まで、次は通る
手札を一枚捨て＞ライトニング・ボルテックス＜発動」

「しまった！？（だがまだ＞攻撃の無力化＜がある）」

雷の束が剣士達を破壊する

「ほら＞六尺瓊勾玉＜を入れないからそうなるんだ」

もう1人のほうが口を開いた

「ウルサい修護！！
＞師範＜の効果で＞キザン＜を手札に戻す」

（なるほどあっちは修護ね
しかも＞六尺瓊勾玉＜を入れてないってことはもしかして……）

「続けるよ
手札から＞ドラグニティーアキュリス＜を召喚
その効果で俺は手札から＞ドラグニティーミリトゥム＜を特殊召喚
し＞アキュリス＜を装備する」

「モンスターを装備？」

「そう、そして＞ミリトゥム＜の効果

装備状態の＞アキュリス＜を場に特殊召喚する
そしてレベル４の＞ミリトゥム＜にレベル２の＞アキュリス＜をチューニング」

アキュリスが２つの輪になりミリトゥムが入る

☆４＋☆２＝☆６

「古に伝わりし橙色の竜騎士よ
兵を操り敵を斬らん」

輪の中でミリトゥムが２つの星になり、全体で光を放つ

「シンクロ召喚！吹き抜けろ！
＞ドラグニティナイト－ヴァジュランダ＜！！」

光がおさまると、橙色の竜が現れその上に鳥獣（ミリトゥム？）が乗っている

ドラグニティナイト－ヴァジュランダ
ＡＴＫ１９００

「＞ヴァジュランダ＜がシンクロ召喚に成功した時墓地のドラグニティと名の付くモンスター１体を装備できる
俺は＞アキュリス＜を装備する」

アキュリスが竜にくっついた

「更に＞ヴァジュランダ＜の効果発動！！

１ターンに１度このカードの装備カードを墓地に送り、エンドフェイズ時まで元々の攻撃力を倍にする
トゥワイス・パワー」

アキュリスが竜の頭上に飛んでいき光を放つとヴァジュランダの体か大きくなった

ヴァジュランダ
ＡＴＫ１９００→３８００

「更に墓地にいった＞アキュリス＜の効果発動
装備カード扱いになってるこのカードが墓地に送られた時、フィールドのカードを一枚破壊する
俺はお前のリバースカードを破壊する」

「ぐっ！？（＞攻撃の無力化＜が！）」

「これで場はがら空きだ
＞ヴァジュランダ＜でダイレクトアタック
ランサドール・ニレンジャ！」

「だはっ！」

日向
ＬＰ４０００→２００

「俺はこれでターンエンド
エンドフェイズに＞ヴァジュランダ＜の攻撃力は元に戻る」

ヴァジュランダ
ＡＴＫ３８００→１９００

龍二ＬＰ４０００
手札０
場　モンスター
ドラグニティナイト－ヴァジュランダ
ＡＴＫ１９００
魔法・罠
なし

日向
「オレのターン　ドロー
オレは＞六武衆－イロウ＜を召喚し、＞キザン＜を特殊召喚
さらに六武の門の効果で＞六武衆の師範＜を手札に加えて特殊召喚
これで＞キザン＜の攻撃力が上がる」

キザン
ＡＴＫ１８００→２１００
イロウ
ＡＴＫ１７００
師範
ＡＴＫ２１００

武士道カウンター
２→６→２→４

隻眼コンビが復活し
さらに盲目の剣士が現れる

「さらに＞六武の門＜の効果で武士道カウンターを４つ使い＞師範＜の攻撃力を１０００Ｐアップさせる」

師範
ＡＴＫ２１００→３１００

「＞師範＜で＞ヴァジュランダ＜を攻撃」

「この瞬間、墓地の＞ドラグニティ－アイギス＜の効果発動
このカードを除外し、ダメージを０にして一枚ドロー」

ドラグニティ－アイギス（オリジナル）
☆３／風／ＡＴＫ１１００／ＤＥＦ１２００
ドラゴン族・チューナー
自分フィールド上の＞ドラグニティ＜と名の付くモンスターが相手モンスターに攻撃されたダメージステップ時、墓地のこのカードを除外して発動する
その戦闘によるダメージを０にし、デッキからカードを一枚ドローする

亡霊化したアイギスが身を挺すも健闘虚しくヴァジュランダは一刀両断された

「な！？そんなカードいつの間に！？」

「＞ライトニング・ボルテックス＜のコスト」

「そうかなるほど！！って黙ってろ修護！
気を取り直して残った２体でダイレクトアタック」

イロウとキザンに斬られる俺

「くっ！」

龍二ＬＰ４０００→２００

「そしてカードを一枚伏せてターンエンドだ」

日向ＬＰ２００
手札０
場　モンスター
六武衆－イロウ
ＡＴＫ１７００
真六武衆－キザン
ＡＴＫ２１００
六武衆の師範
ＡＴＫ２１００
魔法・罠
六武の門（武士道カウンター×０）
伏せカード×１

龍二
「俺のターン　ドロー」

…

……

「悪いけど決めさせてもらう」

「何！？なら俺はリバースカード＞和睦の使者＜発動」

「うん、やっぱ勝ちだ」

「何！？（どうする気だ！？）」

「＞ドラグニティ－ドゥクス＜を召喚
＞ドゥクス＜は召喚成功時、墓地のレベル３以下の＞ドラグニティ＜と名の付くモンスターを１体装備できる
＞ドラグニティ－ファランクス＜を装備、そして＞ファランクス＜は装備状態の時、フィールドに特殊召喚できる
来い＞ファランクス＜！
そして、レベル４の＞ドゥクス＜にレベル２の＞ファランクス＜をチューニング！」

ファランクスが２つの輪になり、ドゥクスが入る

☆４＋☆２＝☆６

「古に伝わりし黄色の竜騎士よ
幼竜を従え敵を破らん」

ドゥクスが４つの星になり光を放つ

「シンクロ召喚！吹き下ろせ！
＞ドラグニティナイト－ロンギヌス＜」

ドラグニティナイト－ロンギヌス（オリジナル）

☆６／風／ＡＴＫ２２００／ＤＥＦ１６００
ドラゴン族チューナー＋チューナー以外の鳥獣族モンスター
このカードがシンクロ召喚に成功した時、自分の墓地に存在する＞ドラグニティ＜と名の付くドラゴン族モンスターを１体選択し、装備カード扱いとしてこのカードに装備することができる
１ターンに１度、このカードに装備されているカードを墓地に送り、相手フィールド上の表側表示のモンスターを選択して発動する
選択したモンスターを破壊し、元々の攻撃力の半分のダメージを当たる
この効果を使用したターン、このカードは攻撃できない

龍二の場に鳥獣（トリブル？）が乗った黄色の竜が現れる

「こいつも攻撃力が低いってことはなんか効果があるんだろ？」

「そう、こいつは召喚した時に墓地の＞ドラグニティ＜と名の付くモンスターを１体装備する
俺はアキュリスを装備」

「またかよ！？」

「そして＞ロンギヌス＜の効果、＞アキュリス＜を墓地に送り＞キザン＜を破壊して元々の攻撃力の半分のダメージを与える
ドラグーン・ボム」

「マジか！？」

ロンギヌスに乗っている鳥獣（トリブル？）がアキュリスを掴んでキザン全力投球（竜）

「オマケだけど＞アキュリス＜の効果で＞六武の門＜を破壊」

日向
ＬＰ２００→０

「くそ～負けた」

「＞和睦の使者＜のタイミングおかしいだろ」

「うるさい！修護」

「あんた…今のデュエル本気じゃなかったよね？」

（あれ？なんでバレてんだ？）

理「え？本当に？」

紗「だと思った」

崇「嘘だろ！？」

一番驚いてたのがデュエルの相手してた本人なのは笑える

修「最初に展開し過ぎなんだよ
だから＞六尺瓊勾玉＜を入れろって言ってんだよ」

崇「ウルサい、俺は六武衆の効果以外で破壊はしねーって言ってんだろ」

「僕が言いたいのはポリシー持つなら、そこに出来る穴を埋めろっ

てこと
すぐに穴はバレる、バレても埋めれてないじゃポリシー以前にデッキそのものが機能しない
そうだろ、特待生くん？」

みんな一斉にこっちを見る

「まあ、確かにそう思うけど、今なんで俺に振ったの？」

「君には崇裕の伏せたカードが見えてたハズだからさ」

「なるほどね、なぜそう思う」

「簡単だよ、最後のターン、君は崇裕がモンスターを破壊するカードは伏せてないってわかってた
じゃなきゃ、あんな勝利宣言出来ないよね？」

「う～ん、だいたいあってるのかな？
正直なとこ言うと、確かに破壊系カードがないのはわかってたよ
だから、残りライフとフィールド状態から考えて自ずと伏せてあるのは戦闘関係のカードかブラフだと思ってね」

理「龍くん、洞察力もすごいね」

紗「それを言うならこっちの人もそうでしょ」

「誉めてもらえ光栄だね、僕は陸奥修護よろしく」

「あたしは和泉理奈、なるべく下の名前で呼んでね」

「私は但馬紗英華、好きに呼んで」

「オレは日向崇裕」

「俺も2人に自己紹介まだだったな
駿河龍二だ、できれば特待生ってのはなしで頼む」

「それはすまなかった
そうだ、よければ僕らも君達の仲間にしてくれないか？」

（唐突だな…けど断るのも変だしな）

「俺はいいけど…理奈と紗英ちゃんが…」

「あたしはいいよ」

「私もいいよ
人多い方が楽しいしね
それに龍二くんと会ったのだって昨日だし、これからは5人で行動しよっか」

そうして俺らは5人で行動することになった

## TURN1　登場（後書き）

次話はまだ完成が見えない上にテストが近いのでいつになるやら…
できるだけ頑張ります

ていうかその前にキャラ紹介があったような……

※設定もイジってあるので気になる方は感想で質問受け付けます

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8863s/

---

遊戯王 ～竜騎士を束ねし者～

2011年11月7日10時09分発行